

近藤則夫著

『現代インド政治——多様性
の中の民主主義——』

名古屋大学出版会 2015年 608ページ

なかみぞかずや
中溝和弥

I 本書の概要

インド政治を総体として捉えることは、難しい。8億人を超える有権者、カースト、宗教、言語、地域など重層的に交錯するアイデンティティ、そして400以上の政党が総選挙に立候補する活発な政党政治など^(註1)、複雑さには事欠かない。本書は、日本におけるインド政治研究を長年牽引してきた著者による集大成とも呼びうる力作であり、徹底して数字による実証を追求している。まずは本書の内容を、簡潔に紹介したい。

本書の目的は、インド民主主義の頑健性を説明することにある。比較政治学において、インドの民主主義は長らく例外扱いされてきた。それは何よりも、古くはジョン・スチュワート・ミルによる「多様な民族から構成される国家において自由な制度を維持することは不可能に近い」という宣託〔中溝2012b, 112〕、そして第二次世界大戦後、民主主義国家の多くは欧米を中心とする先進国に限られていたという歴史的事実由来している。世界でも稀にみる多様性を誇り、かつ世界の貧困を代表するインドにおいて、民主主義が成り立つはずがない、という主張がインド例外論の骨子である。序章「インド民主主義体制の位相」では、この欧米の経験にもとづく例外論に対し、「人口12億を数えるインドが、民主主義論で『例外的』あるいは『周辺の』な位置を占める事態が奇異」(5ページ)であるとし、「一般論とインドの民主主義体制論との間のギャップを埋めなければならない」と主張する。そのために3編から構成される議論を展開する。

第I編「政党システムの変容」は、3章から構成されている。第1章「民主主義体制の成立と課題」においては、独立インドにおける政治制度の構築と、これにもとづいた会議派による安定した一党優位支配の展開を説明する。その会議派による支配の揺らぎを検討したのが第2章「危機の10年と会議派政治の変質」である。1960年代後半の経済危機は政治危機に転化し、インド民主主義の例外とされる非常事態体制に至る。その後の1980年代以降現在に至る多党化を検証したのが、第3章「政党システムの多党化と変容」である。第I編は、政治経済学的アプローチによってインド政治を俯瞰していることが特徴である。

次の第II編「政治意識の変化と民主主義体制」は、日本においてインド政治に関する計量分析を主導してきた著者の真骨頂である。3章から構成され、第4章「社会変容と政治参加」は社会経済的構造変化と投票率の相関関係をデータにもとづいて考察している。その結果、識字率や農業生産性などの社会経済変数が投票率に与える影響は1980年代までは大きかったものの、1990年代以降は小さくなり、代わりに州ダミー変数の影響が大きくなっていることが確認された。第5章「政党システムと経済変動、宗派間亀裂」においては、経済状況とコミューナル暴動が会議派の凋落に与えた大きな影響について分析している。しかし、そのような会議派の凋落、そして政党システムの「断片化」が、民主主義体制そのものへの不信感には結びついていないことを実証するのが、第6章「民主主義体制における『トラスト』」となる。分析の結果、例えば、大規模な宗教暴動が起こっても、それが民主主義体制に対する不信には結びつかないというように、社会部門に対する認識と政治部門に対する認識が分離していることが観察された。すなわち、民主主義体制に対する「トラスト」が存在すると結論づける。

インド民主主義の頑健性を計量的に実証した後、「多数派の専制」という観点から頑健性を検証するのが第III編「民主主義における多様性の中の調和」となる。第III編は2章から構成され、第7章「ヒンドゥー・ナショナリズムと多数派主義」では、1980年代のバンジャープ問題、これに関連した84年の反シク暴動、そして1990年代から2000年代にかけて発生したヒンドゥーとムスリムの暴力的対立を事

例として取り上げ、ヒンドゥー教徒という宗教にもとづいた多数派による暴力を検証する。検証の結果導かれたのは、「多数派の専制」となりうるヒンドゥー・ナショナリズムは、「過激化することではなく、穏健化、または自制すること」(443ページ)でしか、中央で権力を掌握できないであろう、という見通しである。インド民主主義の頑健性は、凄惨な宗教間暴力を経験してもなお、壊されることはなかった。

「多数派の専制」を中央-州関係という観点から分析したのが、第8章「中央-州関係の展開」である。国家統合を重視する政策は、時として「多数派の専制」に陥りやすいが、インドは言語州にもとづく連邦制を導入することにより、「多数派の専制」を慣行として回避してきた。中央と州の関係が緊張するのは、インド国民会議派の支配が退潮に向かう1970年代以降であったが、会議派の退潮が明確になり、権力を獲得するために地域政党との関係構築が不可避になると、協調的連邦制が慣行として定着した。このような協調的連邦制の存在は、インド民主主義の頑健性を強めることとなった。

最後に、終章「多様性の中の民主主義」では、これまでの議論を総括し、インドにおける民族/エスニック次元の多様性は、欧米流の単純な「一般論」とは異なり、むしろ民主主義の柔軟性と頑健性のベースになっていると結論を出している。

II 本書の意義

本書の優れた点は、第1に、インド政治の総体について、各州のデータを駆使しながら分析したことである。これまでインド政治総体について語る際には、中央政府のレベルに特化するか、テーマごとに概説するか、もしくは、いくつかの州を取り上げてインド政治全体を代表させる手法が主流であった。本書の分析が、主に数量データの解析を中心としフィールドワークの手法に依らないことから可能になったことではあるが、各州レベルの多様性を総括的に捉えようと試みたことの意義は大きい。

第2に、第1点と関連するが、著者自らがオリジナルなデータセットを構築し、徹底した計量分析を行った点である。全体を語る上で計量分析が欠かせないことはいまでもないが、他人が整備したデー

タに加えて、著者自身が苦労を重ねてデータを整備し、緻密な計量分析を行っている点は、賞賛に値する。さらに、数量的なデータに加え、政府報告書などの一次資料も丹念に読み込み、かつ膨大な量の二次文献も渉猟している。実証を徹底的に追求した著者の真摯な姿勢は、本書の価値を大いに高めている。

最後に、主題の明確性である。本書は大部の著作であり、時としてひとつのテーマに関して詳細な分析を行っていることから、筋を見失いがちになる箇所もある。しかし、議論は、インド民主主義の頑健性を証明するという主題で一貫している。著者が序章で指摘した、インド民主主義が例外的とされる事態こそが奇異である、という主張には、評者も大いに賛同する。

III 本書の課題

以上のような優れた点をもつ本書であるが、課題を3点ほど提示したい。

第1が、カースト政治に関する分析の欠落である。1980年代後半から1990年代にかけてインド政治を大きく変えたのは、カースト、宗教を軸としたアイデンティティの政治である。本書において、カースト政治に関する分析がないわけではないが(298~301ページ)、理論的には「断片化」(336ページ)、「系列化」(433~436ページ)として捉えられているにとどまる。宗教アイデンティティをめぐる政治は十分に検討されていることと比べると、カースト政治に関する分析の欠落は奇異である。例えば、インドにおいて支配的な集団は存在しなかったとしているが(19ページ)、ヤーダヴは、会議派支配の特徴を上位カーストによる支配であったと分析している[Yadav 1994]。著者が引用しているジャフルローも、北部インドでは上位カーストの優勢が長く続き、この事実が会議派の保守的な性格を規定したと指摘している[Jaffrelot 2003]。著者は支配集団の分析に関し、政治経済学的アプローチから経済政策への影響を主に念頭に置いているようだが、インド政府の政策は経済政策ばかりではない。支配的な集団が存在しないというためには、少なくとも彼らの主張を検討する必要があるだろう。

第2に、キングの推定法に関する疑問である。計量分析の手法全般に関する批評については、森悠子

氏による優れた書評があるのでそちらに譲るが〔森2016〕、キングの推定を用いた宗教間亀裂の分析には疑問が残る。キングの推定によれば、1980年代後半から1990年代前半にかけては非ヒンドゥーの会議派に対する支持率は低下しており、この点に関し著者は「ヒンドゥー多数派の票を得ようとするあまり少数派の安全を確保できない会議派への失望と、他の政党への鞍替え、という結果になっている」（310ページ）と分析する。その一方で、1992年から93年に起こったアヨーディア暴動のあと初めて行われた国政選挙となる1996年下院選挙では、非ヒンドゥーの会議派に対する支持率は、キングの推定によると回復する。そうすると著者は、「よって危機感を募らせたムスリムなど少数派が、伝統的な『庇護者』である与党会議派への支持に戻ったことは不思議ではない」（332ページ）と分析する。このあとに、国民戦線が弱体化したことも一因であろうと留保をつけているが、やはり矛盾した説明ではないだろうか。ムスリムの不安感が、会議派からの離反、そしてその正反対である会議派支持に揺れ動く過程はより丁寧に説明する必要があるだろう。そうでなければ、キングの推定法自体に疑念が生じる。

最後に、これは計量分析全般に該当する問題といえるかもしれないが、計量的に精緻な分析とそれにもとづく解釈の曖昧さの乖離である。例えば、第6章では「トラスト」に関する興味深い分析が行われている。その結果判明した社会に対する認識と政治に対する認識の分離に関し、著者は「選挙、議会（国会や州議会）、司法や警察など民主主義的諸制度は多くの人々にとって日常生活からかけ離れた領域であると認識されているから」（376ページ）と理由を提示する。しかし、宗教暴動の現場を歩き、かつ農村で現地調査を展開してきた評者の観察からは、この理由にはにわかには首肯できない。著者が「社会的トラスト」や「社会不安感」を大きく変動させるような事件や変動の一例と考えている宗教暴動を例に取ろう。評者は、会議派が中央レベルで過半数を大きく失った1989年総選挙戦の最中にビハール州バーガルプルで起こった宗教暴動に関する調査を行った^(注2)。著者の分析からも明らかになったように、凄まじい暴力が起こっても、それが民主主義体制に対する不信には、直ちには結びついていなかった。とはいえ、その理由を、政治が日常生活からか

け離れていることに求めることは疑問である。バーガルプル暴動では、著者の理由付けとは異なり、国会議員は遠い存在では決してなかった。暴動の焦点となったのは、バーガルプル選挙区から長年国会に選出され、州首相も務めた会議派大物候補の暴動への関与であり、これが1989年総選挙におけるムスリムの会議派離れの重要な要因となった。宗教暴動は非日常的な出来事なので、この批判は当たらないという反論も想定できる。しかし、政治体制への信頼を揺るがす多くの出来事が非日常的な事件であることを考えると、ここで日常と非日常を区別することに意味があるとは思えない。

日常生活についていえば、州議会、州議会議員は、国会議員よりもっと身近な存在となる。農村の住民が日常的に接する行政機関は、おおよそ県レベルまでといてよいが、その行政官の態度は、少なくとも村人の認識のなかでは、州政権を誰が、どの党が、どのカーストが握っているのか、という事実が大きく左右される。これは警察の態度にしても同様である^(注3)。もっとも、これらの観察はビハール州という特定のフィールドに関する調査である以上、局地的な現象にすぎないという批判は免れない。しかしそうだとすると、インドにおいて政治部門と社会部門を、著者のいうほどに簡単に切り離せるだろうかという疑問は消えない。むしろ、社会部門と政治部門は密接につながっているのであり、そのつながりのなかで、民主政治がダイナミックに展開しているのがインドの現状であると考えられる。「トラスト」に関するデータは大都市圏に限られるという限界から来る問題かもしれないが、より丁寧な説明が必要であろう。

以上、課題を指摘したが、これらはインド政治を総体として捉える試みとしての本書の意義を減じるものではない。インド政治を何よりも徹底してデータにもとづいて分析しようと試みた著者の功績は大きい。本書は、インド政治を理解する上で必読の書であると同時に、インド政治研究を志す研究者にとって指針となる書である。

（注1）2014年総選挙における有権者数は8億3408万2814人であり、候補者を出した政党は、非公認政党を含めて464党に上る。選挙管理委員会資料（http://eci.nic.in/eci_main1/statistical_reportge2014）

aspx, 2016年2月28日最終確認)を参照のこと。

(注2) 中溝 [2012a, 159-203] を参照のこと。なお、著者はバールプルにおいて、1990年10月以降に大規模な宗教暴動が起こったとしているが(162ページ)、現地調査を行った限りにおいては、大規模な宗教暴動はこの時期には起こっていない。おそらく、1989年10月から11月にかけて起こった大暴動を誤認していると考えられる。

(注3) 例えば、ビハール州において1990年にジャナター・ダルのラルー政権が成立したことにより、役人がこれまでの邪険な態度を改め厚遇するようになったという後進カーストのヤーダヴ農民の証言や、警察による嫌がらせがラルー政権成立後なくなったというヤーダヴ農民の証言などを挙げる事ができる。中溝 [2012a: 279-282] を参照のこと。

文献リスト

<日本語文献>

中溝和弥 2012a. 『インド 暴力と民主主義—— 一党優

位支配の崩壊とアイデンティティの政治——』東京大学出版会.

—— 2012b. 「書評： Alfred Stepan, Juan J. Linz and Yogendra Yadav, *Crafting State-Nations: India and Other Multinational Democracies*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 2011」『アジア経済』53(6): 112-115.

森悠子 2016. 「書評： 近藤則夫著『現代インド政治—— 多様性の中の民主主義——』」『アジア研究』62(1): 31-35.

<外国語文献>

Jaffrelot, Christophe 2003. *India's Silent Revolution: The Rise of the Low Castes in North Indian Politics*. Delhi: Permanent Black.

Yadav, K. C 1994. *India's Unequal Citizens: A Study of Other Backward Classes*. New Delhi: Manohar.

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)